新春対談

旬の町づくりを求めて

～こよなく愛する我が町だから～

平成十一年の新春を迎え、いま大江町は旬の町づくりを求めて、さらに飛躍しようとしています。現在、総合発展計画の見直し作業に入っていますが、新しい計画の策定専門員である中田裕久氏と上田町長に、大江町に寄せる情熱と、間もなく幕が開く二十一世紀の展望を語っていただきました。

大江町長
上田郁雄
&
筑波大学客員教授
中田裕久氏

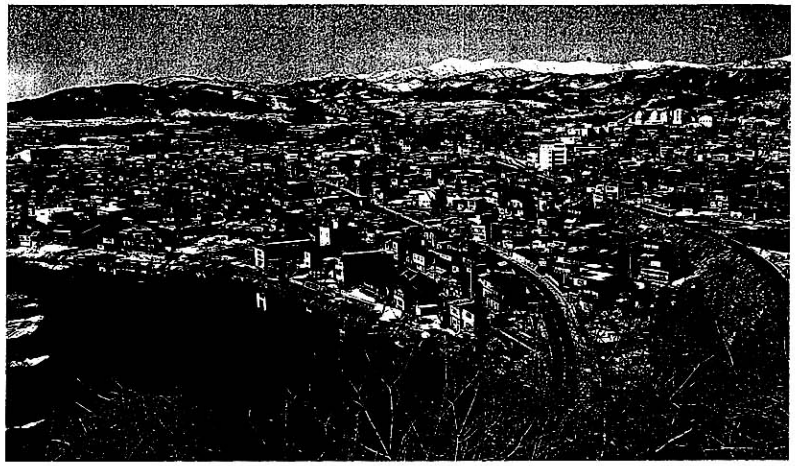
司会／YTS山形テレビアナウンサー
相澤裕子さん

司会　明けましておめでとうございます。本日は、上田町長と中田裕久先生に、今年ますます飛躍する大江町を大いに語っていただきたいと思います。

さて、上田町長は、町民のための町政を基本として、特色あるいろいろな事業を展開していますが、昨年を振り返ってみていかがでしたか。

町長　昨年は、町民のみなさんにご心配をお掛けしました、らふらんす大江がオープンして一年を迎えた年でした。おかげさまで現在も順調な運営を続けており、町民の皆さんには心から感謝申し上げます。安堵するとともに、町民の声をさらに町政に生かしていきたいと心に誓った年でした。

さて、長引く不況の中で、農業や商店街の方は、独自の発想と工夫でやってこられたと思います。農業に関しては、昨年の夏の台風で、リンゴなどが日本の主な産地で被害を受けた影響もあると思いますが、本町の農産物は高値で取り引きされているようで安心しているところです。また、町の商業に関しては、最近の統計を見てみると、約百億円の売り上げがあるんですね。私自身は八十億くらいかと見込んでいましたので、数字の面ではみなさん頑張っていらっしゃると思いましたね。さらに町民一人当たりの所得を具体的に増やし、そして、肌で感じる幸せをみなさんに持っていただけるように、これからも頑張りますよ。



この町は、発展のスピードがとても速い最近は本当に洗練されてきたと思います

特色があって、とても楽しい町

司会　中田先生は、これまで大江町に何度もいらして、精通しているとお聞きしていますが、先生から見て近年の印象はどうでしょう。

中田　実は、この町に初めて来た時の印象と現在の印象は違ってきているんですよ。最初は、何て落ち着いた町なんだろうと思いました。歴史的な町並みと、豊富な果物、そして町全体に清潔さが感じられました。

その後、奥行きの深い大江町を回ってみて、各地域にいろいろな特色があることに気づきました。次から次へと新しい発見があり、

中田裕久（なかだ・ひ[illegible]）
昭和23年生まれ。筑波[illegible]士課程卒。主な著[illegible]に「生活文化の社会学[illegible]」「都市[illegible]の[illegible]ティア[illegible]」があり、世界各地の温泉[illegible]を中心[illegible]リゾート開発に関する研究を続けている。[illegible]町新総[illegible]計画専門員

単に落ち着いた町ではないと考え直しました。

それと、やはり温泉ですね。テルメも柳川もとても賑わっているので、非常に楽しい町という印象も強いです。

最初の印象と、現在の印象が大きく違うことの要因は、発展のスピードが他の町に比べて速いという点でしょう。最近は、本当に洗練されてきたのではないでしょうか。

町長　就任して七年目になりますが、就任当初から、町民の町政に対する関心は高かったですね。そのことが、町づくりのテンポを速めたのだと思います。自分たちの町を良くしたいという町民の心が一体となったのでしょう。その気持ちがなければ、中田先生がおっしゃるような最近の『洗練』はなかったと思います。感謝の念でいっぱいです。

子育て支援にも意欲的に取り組む

司会　さて、話は変わりますが、現代は超高齢化社会、少子化・核家族化が問題となっています。町づくりを進めるうえでも大きな課題となっているのではないでしょうか。

町長　おっしゃるとおりです。まず少子化ですが、古今東西の歴史をみても、少子化対策が成功したなんて施策はないのですよ。しかし、大江町では活気ある町づくりを進めるためにも、これは、ぜひ取り組まなくてはならないことなんです。父兄の養育費の負担を軽くすることがまずもって大事ですが、これは国全体でやらなくてはなりません。大江町では手初めに、三番目の子どもの保育料の二分の一を還元することから取り組んでいます。一昨年までは三分の一還元だったのを、昨年からこのように切り替えました。さらに、乳幼児の医療費の問題ですね。これも、就学前くらいまでは無料にするように国策として考えなければなりません。

司会　若い夫婦向けの住宅提供という考えはありますか。

町長　これは、非常に難しい問題なのです。結婚したら、親と同居できないという考え方を変えてもらわなくてはなりません。しかし、良いか悪いかは別として、現実の姿がそういう考え方に流れ、それで都市部へ人口が流出している訳ですから、それをくい止めなければなりません。若者を定着させるためには、町営住宅などの所得制限を、これからなくしていくという方向で考えなくてはならないでしょう。

引退しても住みよい町

司会　超高齢化社会についてはどうでしょうか。

町長　先程も申しましたように、らふらんす大江が順調に運営されていることは、誠に喜ばしいことです。

しかし、これから介護保険が導入されると、入所する方は施設を選択できるようになるのです。より一層、相手のことを考えた福祉施設が求められるでしょう。親しまれる施設になるよう、努力は惜しまないつもりです。

しかし、それだけでは高齢化社会に向けた対策は不十分です。まず、住民の意識の変化を期待します。お年寄りを大事にし、子どもからお年寄りまで楽しく暮らせる社会を形成しなければなりません。相手の立場を尊重することが、私は高齢化社会を乗り切る第一の手段だと思います。

中田　近代化というのは、個人化と同じことなのですね。そこで生まれる問題は、子育ても老人介護も一緒なのですが、いかに他人に優しくできるかということなのです。

仕事を引退した人が、いかに社会参加していけるかという点も大事になってくると思います。元気で働いているうちはよい町ですが、引退しても住みよい町といわれるような行政の推進が必要ですね。大江町は、環境が整っているので、進めやすいと思うのです。

町長　地域ケアですね。地域が一丸となって進めていく。家族だけではできないことも、地域ならできる。そのことを意識して生活することが大事なのです。介護も子育ても、地域が重要な役割を果たすのです。

ですから、子どもたちとお年寄りの住みやすい地域の条件整備のために今までも頑張ってきたわけです。

地球環境問題は個人の意識改革

司会　さて、今度は地球規模の話になりますが、環境問題についてはどうでしょう。

町長　例えば、ヨーロッパでは紀元前から下水道の整備などが進められてきました。ですが、山形県はおろか日本ではそういう考え方が持てず、ようやく最近になってこの問題がクローズアップされてきましたね。いま私たちは日本民族として、川を汚さない、水質をきれいに保つという意識が必要です。

それに、水環境とあわせて、国民的視点に立って農業問題を考えていく。生産者はもちろんですが、消費者自身がこの問題を真剣に考えていかないと、危険な時代が来ますね。

農業を、国民食糧の問題の側面と、国土の公益的機能という面でもっと大事にしていかなくてはなりません。そのうえで環境問題を考えないといけません。

環境ホルモン、ダイオキシンという問題も憂慮していますが、幸い寒河江地区のクリーンセンターでは平成十三年から、ごみを焼却しても〇・一ナノグラム以下のダイオキシンしか出さないシステムに変わります。

ですから、家庭でビニールを平気で燃やすなどということがあってはならないのです。ここでも個人の意識改革が要求されます。

それから生ごみですね。小学校では、給食の生ごみはすべてEM菌を使い、花壇などに還元していますし、生ごみ処理器などを購入する場合には、二分の一の補助をしています。こういった活動を通して、環境問題にも一歩一歩取り組んでいます。

地球の歴史を考えれば、我々の人生八十年なんて一瞬です。しかし、今やらなければならないことを怠ると、子孫がこの自然を享受できなくなるのです。誰かがやってくれるという意識ではだめです。一人ひとりが認識しなくてはならないのです。

地域住民の参加が活気ある町をつくる

司会　さて、中田先生は全国各地の行政や住民の活動もご存じだと思いますが、大江町にいま必要なもの、あるいはこれから必要になると考えられるものは何だと思われますか。

中田　大江町では、上田町長のがんばりもあって、ハード面ではかなり充実しています。テルメ柏陵、柳川温泉もあって活気づいています。その中で難しいことは、これらを利用して、地域住民がいかに地域参加していくようにするか、だと思います。

行政主導でできるものではありませんので、町民の指導者をどのようにして育てていくかが難しいのです。それには、学校教育の中で、いかに縦の人間関係をうまく築いていくかが大事です。

また、二十一世紀は情報化の時代と言われています。今でもコンピューターを通して情報発信していますが、一度訪れた人がもう一度訪れたくなる情報を発信し、

今やらなければならないことを怠ってはいけない
次代を担う子供たちに、美しい自然を残すために

一度来た人が、もう一度訪れたくなる情報を発信する
ネットワーク社会では、こういうやり方が必要になる

子供は町の宝。子育て支援にも積極的に取り組みます。

お年寄りにやさしい町…。（写真はら・ふらんす大江デイサービス）

さらに一方的な発信だけでなく、外部の意見を受け入れる、相談をも受けるというやり方が必要になってくると思います。

また、大江町民は人間関係をうまく築き、外部をも大切にする。そうすることによって中と外に広がりが出てくるのです。

町長 ネットワークの中で、社会の発展に応じて、どううまく町を築いていくかが、二十一世紀の町づくりを進めていくうえで大きな課題ですね。

70万人の交流人口を産業振興につなげる

司会 先程もお話しに出ましたが、私は大江町というと「温泉」というイメージが強いんです。そして、温泉を核に交流人口が七十万人を越えていますよね。この人口を町長はどう生かしていこうとお考えですか。

町長 温泉の本来の目的は、町民の健康管理と、憩いの場の提供なのですが、あまりにも泉質が良いものですから、町外での人気が高まってしまいました。加えて、昨年オープンした柳川温泉の露天風呂、大山自然公園の新しいコテージなどが人気を呼び、交流人口は増大したわけです。

この方々を、どのように町に定着させていくか、どう商店街に誘導していくかというのは、大変難しい課題です。私は、町のどこに行っても、いろいろな体験ができる工房のようなものが必要だと思っています。例えば、あそこに行けば陶芸の体験、こちらでは漆塗りの体験ができる、また和紙づくり、草木染め、藍染めなどがいたるところにあって、誰がきても楽しめるような体制を整えないと、この交流人口を市街地へ連れてくることができないと考えています。

しかし、こういうことは、住民の機運が盛り上がらないと一朝一夕でできるものではありません。中田先生のおっしゃるとおり、町民の中の指導者が必要なのでしょう。

それから、町の食文化ですね。幸い、「えくぼ美人ラフランス」は大ヒットしていますが、さらに、この町で食べたものが「おいしい！」と人々の印象に残るような文化を定着させなければなりません。そうしてこの、七十万人を越す町を愛する方々の心を捕らえていく必要があります。例えば、この町に来ればいつでもアユやサクラマスが食べられるとか、納豆汁がどこでも食べられるとか、大江町の食材を生かしていくのです。茶屋形式の、誰でも気軽に立ち寄れる店でいいんですよ。

しかし、残念ながらそういう人はまだ現れません。これほどの交流人口がありながら、これが大江の味だ、というものがまだないんですね。これからは、これを何とかしていかなくてはならないと思います。

中田 まずは飲食店で、どこの店に入っても大江町の山菜や旬のお吸い物、漬物だけでも楽しめれば、訪れる人の印象が違うと思います。やはり、きっかけをつくる人が必要なのでしょう。

よみがえれ水郷のまち

司会 さて、二十一世紀を目前にして、今年は町誕生四十周年ということで、町民の方もこの年の飛躍を期待していると思いますが。

町長 今年は、まず体育センターですね。町民の生涯スポーツの拠点としてオープンしますので、あらゆる機会に利用していただきたいと思います。

また現在、水郷大江とはいっても、町の中を流れる水が非常に乏しいんですね。最上川と月布川が流れているとはいっても、これを解決しないと、水郷とは言えません。

私は、地域用水機能の増進を図るため、北堰を利用した整備をさらに進め、「ここは水郷大江です」と胸を張れるような町をつくっていきたい。

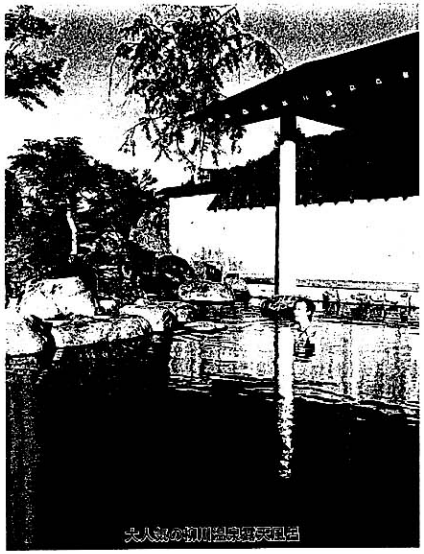
もうひとつ重要な課題は、左沢駅です。終着駅のロマンを、地域の方々とともに考え、駅舎改築とあわせて、地域活動の拠点となるような施設を、平成十三年度着工を目指して努力したいと考えています。

また、柳川温泉には体験農園がオープンします。これは、納豆や甘酒を作ったり、屋内でいろんな体験ができる施設です。

さらに林業では、大江町の杉「西山杉」の育成者に対する手立て、また西山杉の利用者に対してどう恩恵を与えつつ、地元の材料を利用していただくかという事も考えなくてはなりません。

四十周年の記念イベントとしては、記念式典だけでなく、全町民が祝えるようなイベント、そして活力が彷彿するような記念事業を実施する方向で検討しています。

司会 たいへん楽しみですね。それでは、最後になりますが、大江町の十年後を展望していただきたいと思います。



人間と自然が共生できる町

中田 現在も自然志向、登山ブームなどの動きはありますが、十年後はさらに自然にふれる旅が増えると考えています。そうすると、朝日連峰の残された自然が、クローズアップされます。今でも全国から人が集まってきますが、一層人が訪れるようになるでしょう。

また、情報化が発展し、家に居ながらにして収入を得る時代が訪れます。そうすると、大江町は住宅地としてはもちろんですが、住みやすく、そして働きやすい町としても人々に愛されると思います。

町長 何といっても二十一世紀は、人間と自然が共生できる町にしていかなければなりません。十年後になると、合併浄化槽、農業集落排水施設、公共下水道などで、大江町の住宅の七〇％は水洗トイレに切り替わることでしょう。二十年後は一〇〇％になり、清潔な町や川が戻ってくるものと確信しています。

そして、現在古寺地区にサクラマスふ化場があり、昨年は月布川のすべてのえん堤に魚道が整備されました。十年後には、サクラマスが大挙して上ってくる川になっていると思います。

教育面では、現在山里留学を行っていますが、十年後は公共交通機関を利用して、左沢の子どもでも自然豊かな山間部の学校で学べる、いわゆる町内留学が進むでしょうね。私は、この制度はできるだけ早く導入したいと思っているのですが、まだ条件整備が整っていないんですね、残念ながら。自然の中での学習は、大変貴重な経験となりますので、ぜひ進めていかなくてはなりません。

また、大至急改善しなくてはならないのが、国道二八七号と小見の工業団地を結ぶ道路です。十年後には、当然整備されて快適な産業道路となっていることでしょう。

あとはやはり、人ですね。最初にも申し上げましたとおり、人の心を思いやれる、相手の立場に立って物事を考えられる人間が育つ町になっていることを期待しています。

司会 私も、大江町がさらに発展し、魅力ある町になることを期待しています。本日はどうもありがとうございました。

大江町ならではの食文化の創造といろんな体験ができる工房が必要

快適な住宅地としてはもちろんですが働きやすい町としても愛されるように